

今、教育はどうあるべきか 百歳の大田堯さんに聞く



大田 堯 おおた・たかし

一九一八年広島県生まれ。教育研究者「教育史・教育哲学」。東京帝国大学文学部卒業。東京大学教育学部学部長、日本子どもを守る会会長、日本教育学会会長、都留文科大同学長、世界教育学会（WER）理事などを歴任。現在、東京大学名誉教授、都留文科大名誉教授、日本子どもを守る会名誉会長、北京大名誉教授。単著に『教育の探求』（東京大学出版会）、『教育とは何か』『教育とは何かを問い続けて』（岩波新書）、『かすかな光へと歩む』（二ツ橋書房）、『大田堯自撰集成』（全四巻・補巻）『ひとなる』『百歳の遺言』（藤原書店）他多数。

二〇一一年には、その思索と行動の軌跡を追った映画「かすかな光へ」が完成、二〇一八年十月（インタビュー当時）全国七〇〇カ所以上で自主上映を展開。

池谷 先生は最近のご著書の中で今の教育のあり方にとっても強い危機感を抱いて、人間と教育を生きものというレベルから根底的に考え直す必要性を提起しています。とくに「ひとなる」ことを援助するのが教育だという考えは、私たちに大きな問いを投げかけています。まず、先生がなぜ教育をこのようにとらえたのかをお聞かせください。ただき、そのうえで、教育に携わる人たちに、何か大きな励ましをいただけたらと思います。

……誤訳された「教育」——上から下へ……

大田 educationを明治の初めに「教育」と訳したのは誤訳です。これをまずはつきりさせることが大事です。このeducationという言葉は、イギリスの辞典やフランスの大辞典を引くと、比較的新しい言葉だと書いてあります。例えばscienceとかcivilizationなどの言葉が使われるのと同じ時期に、educationという言葉が使われている。フランス革命などの民主主義革命が終わった後の言葉ですから、educationには「引き出す、子どもの内面を引き出す、新しいものを引き出す」という意味が含まれています。

ところが当時の明治政府は、自由民権の運動が起こっていったので、そんな外国の考えば

序章

民主主義と平和と教育

——民研三〇年記念によせて

堀尾輝久

はじめに

私に与えられたテーマ「民主主義教育は何を問うべきか」は 民主教育研究所はなにを問うてきたか、問うべきか、民研三〇年の総括と展望・課題ということでもあろう。

とはいえ、民研の設立以来初代の代表として一八年民研活動に関わってきた私自身は「民主主義教育」という表現、そしてそれを主題とした論文は意識的に避けてきた。わが機関誌の名称も敢て『人間と教育』としてきた。問うべきは「人間と教育」「民主主義と教育」であり、民主主義教育のコンセプトがなにを意味するかは 時に漠として限定出来ず、時に教育内容に限定され過ぎるくらいがあり、テーマ設定としては不適切だと考えてきたからである。「民主教育」の表現にも同様の問題があるが、民主教育研究所の呼称は国民教育研究所との関係、それに変わるものとしての新研究所の発足

時の状況が大きい。民研の英文表記も Research Institute of Democracy and Education である。

私たちが問うてきた「民主主義と教育」は、まず、民主主義とはなにか、教育とはなにか、そしてその関係が問われる。ここでは「人間と教育」の問いと重なる。

一 問い直される民主主義

1 「人民の力」としての民主主義

民主主義とはなにかが問われ、民主主義を担う主体としての人民(国民・ビープル)をいかに育てるか、その教育とはなにかが問われてくる。

歴史的にも、社会通念としても、民主主義とは *demokratias* つまり「人民の力」の意に発し、リンカーンに因んでいえば「人民 (People・ビープル) の、人民による、人民のための」ガバメントである。ガバメントとはなにか。政府では狭過ぎる、政治であり、経済であり、社会のあり方だとして理解されてきた。

ところで日本語としての「人民」はリンカーンの訳語ではあっても、日常語にはなっていない。しかし日本国憲法の国民は *people* と訳されている。国民主権は *people's sovereignty* である。であれば国民 *People* 人民として、従って、国民主権 人民主権と理解し、使用すればよい。因みに丸山眞男は一貫して国民を人民としている。しかしまた、私たちは護憲の立場からは俄に「国民」を放棄す